

## 政治のための教養―丸山眞男百歳

荻部 直

この「丸山眞男百歳」というタイトルは、昭和の戦前期から活躍したマルクス主義の歴史学者であった服部之総が、「原敬百歳」というエッセイを書いているところから借用したものです。ただ、この「百歳」には単に丸山眞男が生まれて百年めというだけには尽きない意味をもたせたつもりです。

今年、二〇一四年はまた、第一次世界大戦が始まってから百年めでもあります。この世界大戦はさらに世界の先進国にデモクラシー賛美の潮流を巻き起こし、日本においてもデモクラシーを実現しようという議論が本格的に闘わされるようになった。それをよく示すのが、吉野作造が『中央公論』一九一六年一月号に載せた「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」という論文です。一月号ですから、実際に発売されたのは一九一五年の末。

したがって一年の違いを無視して言えば、今年は日本におけるデモクラシーの百周年と呼ぶこともできるでしょう。そういう年に丸山眞男が生まれたのは偶然でしょうかありませんが、この機会に日本における

デモクラシーの百年ということを考えるのも意味のあることだと思います。

つまり、デモクラシーをいかに確立し、いかに健全に運営するかということは、現代でも常に問われ続けている課題です。その時に重要な問題の一つは、デモクラシーの制度のもとで政治にかかわる一人一人の市民は、どのようなものの考え方をすればいいのかということでしょう。もっと強調して言えば、政治に参加してゆくための資質とはいかなるものか。その意味での「政治のための教養」という問題を切り口としながら、丸山眞男の思想を読み解いて紹介しようと思います。

### 一 出発点としての一九四五年

丸山眞男は、政治思想史研究者としては戦前・戦中期から仕事を始めていましたが、本格的にデモクラシーの論者としての活動を始めたのは、一九四五年の日本の終戦をへたあとです。その出発点に大きな

影響を与えた出来事として、一九四六年二月から翌年まで続いた、庶民大学三島教室での経験が挙げられるでしょう。

詩人の荒川洋治さんは、「心理」(『現代史手帖』二〇〇一年一月号初出、『心理』みすず書房、所収)というおもしろい詩で、この丸山と庶民大学とのかわりを題材にしています。そこで描かれているのは、学生、商店主、農民、主婦といった、名前のとおりの庶民たちから「子犬」までもが、丸山眞男の講義に集まり、熱心に語りあっている情景です。

荒川さんの詩では、丸山の講義の中心は「なぜ戦争は起きたのか。どうして日本人は戦争を阻止できなかったのか」という問いであったと語られています。つまり、三島市に住んでいるごく普通の人たちが集まって、東京からさまざまな知識人を呼んでその講義をきき、勉強するとともに議論していた。そのような荒川さんはよく描きだしています。

この庶民大学は、本部達二という丸山眞男と同年輩の労働法学者が戦時中から三島に疎開して住んでいて、戦後になって住民たちとともに始めたものでした。この本部が仲介役となつて、丸山のほか、その兄弟子にあたる政治学者の中村哲<sup>ちくち</sup>、社会学者の清水幾太郎、それからさつき名前を挙げた服部之総も話して来ています。芸能関係、文学関係では、映画監督の山本薩夫や作家の宮本百合子が呼ばれている。ちょうどこの期間に日本国憲法の草案が発表されましたから、一九四六年六月には、この庶民大学のメンバーが中心になって憲法改正草案市民検

討会という催しが三島で開かれてもいます。

丸山眞男は、庶民大学の発足の前に講演に呼ばれた機会も含めれば、三回、三島に行っています。当時の列車ですから、超満員で窓から入らなければいけないという苛酷な状態の東海道線で、東京から往復する。日帰りはできませんから一泊するときに、主催団体だった三島文化協会の世話人をやっていた米屋さんの二階に泊まる。すると講義が終わった後も、その二階に米屋さんが議論をしに来たと、『丸山眞男回顧談』下巻(岩波書店)で回想しています。

それによると、丸山が話していると米屋さんが「ただいまのお話は、いただきました」と答えた。いかにも米屋さんらしいんですけども。丸山眞男にとつてはポジティブな衝撃だったと思うんですね。「『いただきました』が非常に面白かった。単に頭で理解したのではなくて、いまの言葉で言えば、体でわかったと。そこが本当に庶民なのでしょうね、決して知ったかぶりをしない」と丸山は回顧談で語っています。

つまり、相槌をうって表面だけわかったふりをするのではなく、本当にわかったということ、を、「いただきました」と実感のある表現で発言する。これは丸山眞男のような知識人にとつては衝撃であったのです。あるいは、こういうふうにも丸山は語っています。「まさに『学問のすゝめ』の時代ですね。すごい欲求です。今からは考えられないくらいです。自己弁解になるけれど、一方的に知識人が押しつけたというの、まったく実感と違うな。むこうから沸き上がるようにやってきて、こっちがややタジタジというのが実感です」。

この発言は晩年になって丸山の記憶が美化されたというものではないでしょう。丸山眞男と中村哲とが加わった、「新学問論」という一九四七年の座談会があります（『丸山眞男座談』第一冊、岩波書店、所収）。そのなかで中村哲が、おそらく庶民大学での経験を念頭に置きながら「そういう意味では実際こっちから教えるのでなくて、教えられに行くようなものです」と言っています。

つまり、丸山眞男や中村哲が教育を受けた戦前の社会では、非常にごく少数の人だけ、同じ学年の男性のパーセントに満たない数の方が高等教育を受けるとい時代ですので、終戦直後はまだインテリと庶民との間の距離は非常に大きい。そのときに、そうした庶民たちのあいだで揉まれ、彼らの言葉に触れていった。この経験が、丸山眞男がデモクラシーについて確信を深めていく、大きな基盤になったのでしょう。

この当時すでに丸山眞男は戦前・戦中から、荻生徂徠や本居宣長といった徳川時代の思想家たち、あるいは福澤諭吉の思想に関する論文を発表して、若い政治思想史研究者として活躍していました。戦後はさらに「超国家主義の論理と心理」という論文のなかで「天皇制」を頂点に置く日本の近代国家を支えた精神構造を批判的に解剖して、ジャーナリズムから注目を集めています。

しかし、そうした学問上の知見を庶民に向けてじかに話す、そういう体験を初めてもったことが、丸山眞男の思想家としての人生にとって重要だった。講義に参加した三島の庶民たちの側も、新しい時代の

なかでどう生きていったらいいのかを自分の頭で考え、その糧となるような知識を貪欲に求めている。教える側と教えられる側の相互の教育の場としての庶民大学が、その後の丸山のデモクラシーへの信念を支えた根源的な経験を作りあげたのでしよう。

『庶民大学通信』という庶民大学で発行していた雑誌に、丸山は「デモクラシーと人間性」という文章を発表しています（一九四六年四月、『丸山眞男集』第十六巻、岩波書店、所収）。庶民大学の受講生が投げかけてきた、自由主義と民主主義はどう違うのか、という質問に対する答として書いた文章です。丸山はここで、デモクラシーは人間の理性に対する信頼を前提とする、そういう意味での樂觀主義に立つと指摘していますが、それは決して、人間はみんな優しいというお人好しの思想ではありません。「どんなに意見や利害がちがっていてもよく話し合えばお互いの立場が了解され、円滑な共同生活が出来るということ考え方は、人間が自分を反省する能力があるからこそその建前になっっているわけです。この自己反省の能力が則ちわれわれの理性であり、自由主義や民主主義はすべてこうした人間理性に対する信頼を基礎とした主張です。私が人間性に対する樂觀主義といったのはこの意味です。従ってそれは決して人間が現実のままで完全であるとか、人間の性質のなかには『悪』がないとかいう意味ではありません」。

つまり、社会には当然、悪人も存在するし、利害や意見のくいちがいが生じるのが通例です。しかしそれでも、とことん話し合うなかから自己反省を繰り返していけば、どこかで共通理解を見いだせるはず

だ。そういう意味での理性への信頼が、ここで述べられています。そう考えるならば、人々が自由に意見を發表することを妨げないという意味での自由主義は、民主主義と密接につながるものだとわかるでしょう。「民主主義は自由主義の主張を政治的・社会的にひろげていったものです。歴史的に言っても封建主義に対して自由主義の主張がまず現われ、やがてそのなかから民主主義が成長して行ったのです」。

この「デモクラシーと人間性」という文章は非常に短いのですが、すでにここに、丸山眞男がその後も課題とし続けた問題に関する見解が登場しています。一九五八年に行なった座談会「戦争と同時代」(『丸山眞男座談』第二集所収)のなかで、自分は戦後、二つの問題と格闘し続けてきたと語っています。一つは「天皇制」、もう一つは「マルクス主義」です。

「天皇制」という言葉を丸山眞男が使う場合、それは大日本帝国憲法や日本国憲法の第一条に規定された皇室の制度について語っているわけではありません。世襲君主制の制度を作る前提になっている「精神構造」の問題として「天皇制」をとらえなくてはいけないというのが、丸山眞男の姿勢です。つまり、明治時代から、近代日本の国家・社会に浸透していた「精神構造」の抱えていた病理について、それを批判的に捉え克服しなければいけないと説いていたのでした。

先ほど名前を挙げた「超国家主義の論理と心理」という論文では、「抑圧移譲」という言葉を使って、そうした近代日本の国家・社会に浸透した意識を批判しています。官僚機構にしても軍隊にしても会社にし

ても、あるいは大学や学校でも、そのなかの秩序が、上下に多くの階層を持ったものとしてとらえられている。そしてそのなかのどこかの段階に自分がいて、上の人間にはこびへつらい、下の人間には威張り散らして自分の意見を押し付ける。そういう意識を、上から下まですべての構成員がもっていて、抑圧が次々とより下の方へ転化されてゆきます。こうした意識が、大日本帝国においては、一般人から政治家・官僚・軍人まで、またひよつとすると天皇自身にまで浸みわたっていた。この「抑圧移譲」の精神構造を批判的にとりあげたのが、「超国家主義の論理と心理」です。

あるいはまた「軍国支配者の精神形態」という論文(一九四九年)では、そうした精神構造を前提として、政治家や軍人が、自分が決定したことは上から命令されてやったのだとか、自分にはその内容を変える権限はなかったという言い方をして、自分自身の良心に基づいた責任のとり方をしない、「無責任の体系」が厳然と存在していたと指摘しました。

こうした精神構造の病理を克服するにはどうしたらいいか。そのためには、個人個人が内面において自立性を確立し、積極的に社会に対して声をあげ、政治に関わってゆくことが必要だ。そういう順序で丸山の考えをたどってゆくと、「天皇制」の精神構造に対する批判と、「デモクラシーと人間性」の説明が、問いとそれに対する一種の解決策という関係になっていることがわかります。

もう一つは「マルクス主義」の問題です。丸山眞男は自分自身の主

義・信条については、哲学的な体系としてのマルクス主義に対して否定的な立場をとっています。しかし、社会と歴史を全体的にとらえる視座を提供する点については大きな敬意を払う。そこで、マルクス主義のどの点を認め、どういう方向へ克服するかが思想家としての大きな課題だった。

マルクス主義の理論においては、経済構造が人間の精神のあり方を一方的に規定します。したがって十八・十九世紀に確立した自由主義の思想や議会制度などは、歴史的条件に規定されたブルジョアジーによる支配の道具にすぎない。やがてそうした経済構造が改められ、支配体制も倒されて共産主義社会が実現すれば、発展的に解消されるものだ。それがマルクス主義の考え方です。

これに対して丸山眞男は、「デモクラシーと人間性」にも見えますように、あくまでも人間の「自由」が社会に主体的に関わっていくための基礎になると説きます。自由について、「デモクラシーと人間性」のなかでは、「消極的な自由」と「積極的な自由」という言葉を使っている。「消極的な自由」とは、個人への拘束をとり除くことで、先の意味での自由主義の基礎となるものです。これに対して「積極的な自由」は、人間が社会に主体的に関わっていくことで、つまりはデモクラシーそのものと解釈できるでしょう。

丸山は積極的な「自由」という言葉を用いて、消極的なそれとの連続性を示唆します。そういう形で、自由の追求がデモクラシーの基礎となることを示しました。しかもそれは、人間の理性と関係する以上、

歴史的条件を超えた普遍的な原理ですから、時代が変わったからと言って、放棄してよいものではありえない。そうした意味で、「天皇制」「マルクス主義」両方との格闘という課題が「デモクラシーと人間性」のなかですでに現われているんですね。

さらにもう一つ付け加えれば、やや逆説的な言い方をすれば、デモクラシーそのものとの対決という課題も、そこには含まれていると思われまます。それは、丸山が若いころから著作をよく読んでいた、ドイツの公法学者、カール・シュミットの、自由主義とデモクラシーとの関係に関する議論への応答になっていると言えるでしょう。シュミットは、『現代議会主義の精神的地位』（一九二三年）という著書の中で、その両者をきっぱりと切り分け、単純に言えば二十世紀の現代においては、デモクラシーの方が自由主義に対し優位に立つと論じています。

シュミットによれば、自由主義が原理とするのは、永遠の討論です。これに基づいて、とことんまでさまざまな意見を闘わせるといいますが、議会を支える原理になっていると指摘しました。これに対して、デモクラシーの原理としてシュミットが挙げるのは、「同一性」(Identität)です。デモクラシーが原理とするのは、あくまでも人々が全体として共通の利益や目標に同一化すること、つまり全体の目標を皆で決めて、それを実現することです。

そうすると、デモクラシーと自由主義とが衝突する場合もありうるでしょう。そして、さまざまな意見を闘わせるといふ手続などにこだ



わらず、カリスマ的な指導者が登場し、全体の利益や目標を実現するよう、強力に指導してくれた方が、デモクラシーの原理にとっては望ましいかもしれない。したがってシュミットは、デモクラシーが要求する統治形態としては、独裁もありうる」と説きました。全体の利益を実現する指導者に対して、国民の全てが拍手喝采を送るというデモクラシー。これは当然、全体主義の論理に簡単に転化します。

こうした意味でのデモクラシー、つまり単に多数決として理解され、しかも場合によっては全体の利害を実現する指導者の存在を歓迎するようなデモクラシーとの対決も、丸山の「デモクラシーと人間性」の議論には入っているのだらうと思います。リベリズムが確立することで、デモクラシーも健全に営まれるのであり、両者は不可分だ。そうした形で、この人間の理性による反省と自己変革の能力に対する信頼が、リベリズムを基礎とする丸山のデモクラシーへの信念を支えていたのでしょうか。その信念を決定的にしたのが、庶民大学での体験であったと思います。

## 二 「政治化」と情報化社会

いま述べたように、理性によって自己反省し、自己変革しうる存在としての人間像が、丸山眞男の考えるリベラル・デモクラシーの支えになっていきます。しかし同時に丸山は、理性的な人間それ自体の存在が、この現代社会では困難になっているとリアルに認める立場も、早い時

期からとつていました。それは、やはりカール・シュミットが提示した概念、「政治化」(Politisierung)にかかわります。丸山は助手時代、一九三八年に発表した文章「一九三六―三七年の英米及び独逸政治学界」ですでに、この言葉を用いて二十世紀の国家と社会のあり方を説明していました。

ここに言う「政治化」の問題は、のちの大衆社会論や情報化社会論において提起された問題とも重なる要素を多くもっています。戦後にも丸山はこうした現代社会の特徴を、ファシズムや政治的無関心の問題と関わらせて説明しています。一方では、ナチズムの例に見られるように、マスメディアを通じた国家の宣伝活動が人々を感情面で刺戟して熱狂的な政治参加に向かわせ、全体主義的な支配を可能にする。あるいは逆に、メディアが政治問題を熱心に報じることをせず、娯楽にばかり人々の関心を集中させ、脱政治化を引き起こすことによって、既存の権力が温存されてしまう。

論文「人間と政治」(一九四九年)のなかで丸山はこう言っています。「政治の働きかけは、理性であろうと、情緒であろうと、欲望であろうと、人間性のいかなる働きをも必要に応じて動員する」。そしてそれは「宗教も、学問も、経済も」すべての物事を、「いつでも自己の目的のために使用する」ものだと指摘します。こういう状況では「近代国家によって一旦分離された、外面と内面・公的なものと私的なもの・法的・政治的なものと文化的なものとが再び区別ができなくなってくる。政治権力が、ラジオとか映画というような、非常に高度な近

代的技術を駆使して」と丸山は指摘しますが、ラジオと映画が例として挙げられているところが、いかにも一九四〇年代らしいですね。いまならインターネットを挙げるでしょうが、そうした「非常に高度な近代的技術を駆使して、自分のイデオロギーを朝となく晩となく人民に注ぎ込む」ことが、政治権力を維持するための不可欠の手段になり、それに対抗しようとする陣営の側も、同じような宣伝合戦を繰り広げる

人々がこうした情報の渦にまきこまれてしまう現代社会では、人々が自分自身の頭で、理性を働かせながら政治について判断を下すという営みが、非常に難しくなってしまった。丸山は、「現代における人間と政治」（一九六一年）という論文のなかで、「イメージ」による精神の支配を問題にしています。現代においては、異なる政治的立場の人が、それぞれ異なる世の中のイメージのなかにとり込まれて生きている。「内側の住人と外側の世界とのそれぞれにおいて、『世の中』のイメージについての自己累積作用がおこり、それによって両者の壁がますます厚くなるという悪循環」が起きていると丸山は表現しています。

この時代ではもはや、「ひまじまの『虚構』、さまじまの『意匠』」のなかにしか住めないのが、私達の宿命である」。社会の姿をリアルにとらえ、理性的な判断に基づいて行動して、政治に参加する個人が、成り立つのははや難しくなった。そういう現代の情報化社会のあり方を指摘しています。この文章が発表された六〇年代初頭よりも、む

しろ現代にびったりくるような指摘ではないでしょうか。丸山の警告は早すぎたのかもしれない。

こうした現代社会の病理に対して、それに対する対応策として丸山が提起するのは「境界に住むことの意味」です。つまり、何らかのイメージの内側にいることは所与の条件として、同じく内側にいる住人たちと実感を共有し続ける。そして同時にまた、外からの声にも耳を傾け、外との交通を不断に保ってゆくこと。そうした姿勢を、この論文では提起しています。

このように一方では人間理性への信頼を抱き、他方では情報化社会のような現代的条件を厳しく認識する、その二つのあいだの葛藤を正面から見つめながら、いかにしてその困難をのりこえるのか。戦後の丸山は、いま紹介した「現代における人間と政治」における問題提起だけにとどまらず、さまざまな思想史研究の仕事、あるいは評論・エッセイのなかで、この難問に答えようとしていたのだろうと思います。今日はそうした仕事のうち、一点だけ、「教養」という問題についてお話しします。

### 三 「政治的教養」と「遊び」

丸山眞男の師であった政治哲学者、南原繁は戦後日本の教育改革、とりわけ現在の大学制度の発足に大きな役割をはたした人物でもありました。旧制大学から新制大学への変化は、もちろん三年から四年に

なったとか、男女共学になったとか、その内容はさまざまです。そのなかで重要なのは、専門教育あるいは職業教育だけではなくて、「一般教養科目」をも教授することを大学の重要な役割として規定したということでしょう。

実はこの教養教育の創設に関して、南原繁が非常に大きな働きをしたことが、土持ゲリー法一『戦後日本の高等教育改革政策』（玉川大学出版部、二〇〇六年）で明らかになっています。戦後の日本の教育改革はGHQの指令によって起きたといわれていますけれども、実際には日本側がかなりの程度、具体案を作っています。特に高等教育に関してはアメリカ側は日本の高等教育についてほとんど知らなかったので、ほぼ日本側から考えた案が実現することになりました。そのときの中心の一つが教養教育の新設です。

こうした高等教育改革に着手するのと前後して、南原繁は、「新日本の建設」という講演（一九四五年十一月）を、東大の法学部長として学生に対して行なっています。そのなかには、これからの大学教育には「政治的教養」が大事だという言葉が見えます。「政治的教養」について、この講演では「人は国民たると同時に、あるいはその以前に、各自それぞれ一個の『人間』として自己の理性と良心に従って判断し、行為するところの自主自律的な人格個性たることが根本である」と説明していました。

南原繁が戦後の大学に一般教養科目を導入したときの「教養教育」のモデルは、アメリカです。ハーヴァード大学ではちょうど一九四〇

年代に教育改革が行なわれていて、その担当委員会がアメリカの大学における general education（普通教育・教養教育）についてのプランを書いた長い本、『General Education in a Free Society』（1945）を刊行していました。それを南原も参考にしています。

この報告書は、大学の学士課程教育を含む general education の目的は、人文学・社会科学・自然科学を幅広く学ぶことを通じて、学生が「よき市民」に成長することだと述べています。つまりそうした意味で、大学での教養教育はそのまま「政治的教養」に結びつく。この理想をめざしながら、戦後日本の大学における教養教育は出発したのでした。現実にはその後六十年の時間をへて、大学の学士課程教育がどうなっているかについては、今日は割愛します。

丸山眞男の方は、大学教育に関するまとまった論稿は残していません。ただ、『春曙帖』というノートに書き付けていた内容が、没後に『自己内対話』（みすず書房）という本に収録されて刊行されていますが、そのなかにおそらく一九六八年、大学紛争のさなかに書いた東大改革案が載っています。また、それと関連して「大学は何を学ぶところか」という文章がありまして、それがなかなかおもしろいんですね。

この文章のなかで丸山は「『遊び』としての学問、遊びに専念する場としての大学」と「専門化し、分化した知識の市場としての大学」、そういう二つの側面が大学にはあると指摘します。後者はいわゆる専門教育・職業教育のことで、丸山は「問題解決の具としての学問」とも呼んでいます。丸山は、前者、「遊び」としての学問」の意義が現



代においては忘れ去られているとおそらく考えて、ノートではそちらの方について詳しく持論を展開しています。

丸山は前者について「『問題』を前提としない学問である。最悪の学問教育は、問題解決の具ともならない知識の詰めこみ教育である」と書いています。また、こんな風にも言っている。「対象としてはどんなに切実な現代性をもつようなテーマについても、『アカデミックな』研究にはあそびの精神が必要であり、意味がある。問題解決の具としてはない学問、ただ無限の対話（自己内対話をふくむ）、ないしだけりとしての学問が、どこか分からぬ時と場所で『生きて』来るものなのだ。こういう『遊び』としての学問は紙一重でデカダンスになる。しかしデカダンスを賭さないで、スケールの大きな学問的業績は生まれない」。

「遊び」の強調は、オランダの歴史学者であったヨハン・ホイジンガの著書、『ホモ・ルーデンス』（一九三八年）をたぶん背景としているでしょう。人間は物をつくる動物（ホモ・ファアベル）だという普通の理解に対して、「遊び」も人類の様々な文化のなかで、歴史上大きな要素を占めてきたと指摘したおもしろい本です。実は一九六三年に出た日本語訳（高橋英夫訳）の本が、丸山文庫に入っていますから、これを読んでいたことが想像できるでしょう。

『ホモ・ルーデンス』のなかでホイジンガは、「日常生活」とは別のあるものとして、遊戯は必要や欲望の直接的満足という過程の外にある、いや、それはこの欲望の過程を一時的に中断する」（高橋英夫訳）

と説明しています。つまり何かの必要のために、あるいは欲望を満たすために活動するのではなく、遊びという活動それ自体を楽しむことが、充実した意味を人間に実感させる。そのことも人間が生きていくうえで必要だと述べています。

しかし同時に、遊びにはルールが大事だというのがホイジンガの考えなんです。その議論は政治の問題と密接に関わってきます。この『ホモ・ルーデンス』のなかには、先ほどふれたカール・シュミットを批判した箇所があります。それは一九三〇年代にドイツではやった「非常時」(Ersatz) という言葉をめぐる議論でした。この Ersatz というドイツ語は、そのまま訳せば「まじめな時間」という意味になりますから、ホイジンガに言わせれば、その性質はまさしく「遊び」の時間と対極にある。

その文脈で、ホイジンガはカール・シュミットの代表作である『政治的なものの概念』（一九三三年改訂版）に対する批判を述べています。「政治的なものの概念」のなかでは、Ersatz という言葉それ自体はあまり登場しないと思いますが、それと類似した、日常性と対立する「例外状況」の概念をシュミットは多く用います。その「例外状況」において友と敵を区別し、敵を殲滅する。そうした行動が「政治的なもの」の原理をなすとシュミットは説きました。

これに対してホイジンガは『ホモ・ルーデンス』のなかで批判を加えています。ヨーロッパの十六・十七世紀の君主たちどうしの戦争は、ルールを守り、兵隊たちだけが戦争をする、遊びのようなものだった。

外交もまた同様です。「いったい、遊戯規則を遵守するということが、諸民族、諸国家間の交渉の場合のように、不可欠なものであることはない。一たびそれが破られれば、社会は野蛮と混沌に陥ってしまふ。しかしその反面われわれは、戦争というものは、威信を求めて行なわれる原始的な遊戯に形式と内容を与える闘技的精神へ回帰してゆくものでもある、と考えざるを得ないのである」。

戦争を遊びだと言い切ってしまうは、不謹慎にも聞こえるかもしれませんが。しかし他面、相手をすべて殲滅するまで終わらないというイメージで戦争をとらえることが、歴史上どんな悲劇を生んできたかということを考えてみると、「遊び」としての戦争の方がずっとましだと思われるでしょう。対立状況があつても、おたがいな一定のルールの範囲内で攻撃しあい、適当なところで手を打ってゲーム終了とする。そういう戦争の方が、人間にもたらす被害ははるかに小さいでしょう。それは戦争だけでなく、政治における対立状況をどう克服し、共存に導くかという過程についても重要な知恵のように思えます。

丸山眞男による日本政治思想史の講義には、ホイジンガの以上のような議論を頭に置きながら語っているような部分があります。一九六五年度の講義の「武士のエートスとその展開」という章（『丸山眞男講義録』第五冊、東京大学出版会、七一頁）では、鎌倉時代の武士たちがお互いに騙し討ちをせず、正々堂々と闘っていたことについて「戦闘はまさに互いに武者としての身分的等質性を意識しあつたものが対等に、一定の手続きにしたがつてフェアに行うところのゲー

ム——しかし、生命をかけた厳粛な遊戯であつた」という言葉があります。学問についても、そうしたルールを守つた「遊び」という側面を、丸山眞男は強調したかつたのではないでしょうか。

一九六七年に丸山が鶴見俊輔さんと行なつた「普遍的原理の立場」という対談があります（『丸山眞男座談』第七冊所収）。そのなかで、徳川時代の社会生活にあつた「型」の洗練を丸山は高く評価しました。「型を磨き洗練することで、全体の文化体系をあれほどに完成した社会というのは、江戸時代以外にはない」といつて、学問と剣道、さらに遊郭での遊女の客に対する接待のしかたに、「型」が生きていた例を見ています。そして丸山が論じるのは、現代にも通じるような学問における「型」の重要性なんですね。つまり、一定の方法とか、論理的読解力とか、表現力の「型」を身につけることで、初めて独創性のある業績を創りだし、人々に説得的に提示できるというわけです。

大学における「遊び」としての学問と丸山が言つたとき、こうした「型」をルールとして守りながら行なう「遊び」として考えていた。そう読んでもいいのではないのでしょうか。そうした知的営為を、大学で学生や受講生として積み重ねることを通じて、政治における対話に向けた思考能力と感覚が養われていく。それが『遊び』としての学問という言葉で、丸山が大学教育について考えた内容になるのではないかと思います。ここでは大学の学士課程教育を念頭に置いています。現代では生涯教育の時代になっていますので、大学以外のさまざまな学びの場面にも応用可能ではないかと思えます。

一九二四年六月、東京女子大学の二代目の学長になった安井てつが語った「就任の辞」という文章があります（『学友会雑誌』五号、一九二六年三月掲載）。そこには、この大学が旨とする liberal education の理念について語った部分があります。「College には Professional の性質を有つものと Liberal の性質を有つものがあります。「中略」或種の教育は直接生活に必要なものを授くるのでなく、人間生活を理解するに足るべき根本知識を与えて、特別の仕事に従事する基礎を造ることを目的とするものであります。即ち職業教育の基礎又は背景を造るものであって、甲は直に教育の結果を予想し、乙は最善なる結果を将来に収めんがために其の基礎となるべきものを重大視するのであります。甲は教育の近路を通り乙は迂回するのであります」。

「近路」をゆく職業教育もしくは専門教育と、「迂回する」教養教育。後者がリベラルな教育と呼ばれるのは、特定の職業や目的のために行なうのではなく、そうした特定の目的から一歩離れた態度でやってくる教育という意味でしょう。丸山の言葉で言えば、「遊び」としての学問の姿に通じてきます。そうした「遊び」としての学問に真剣に触れることが、自由な人間として政治の事柄をみずから判断するための基礎訓練になること。それが、丸山が大学におけるリベラル・アーツの教育に期待したものだと思えます。